武者小路実篤と昭和九年

――『維摩経』が書かれた「仏教復興」期をめぐって――

瀧田　浩

一、昭和九年の文壇から遠く離れて

本稿では、これまで充分に研究されていない昭和九（一九三四）年当時の武者小路実篤を、主として同時代の仏教をめぐる状況の中に置いて考察する。この時期の武者小路はこれまで重視されてきた研究課題と直接結びつくトピックがなく、また武者小路と文壇との密接なつながりも失われているため、ほとんど研究されていないに等しい。しかし、この研究の隙間の時期を新たな視角から検討することは、この後から顕著になっていく戦争に対する肯定的な発言、戦後の活動を研究・評価するための重要な基盤を形成すると考えている。

この時期がほとんど研究されていないといっても、亀井勝一郎、本多秋五、大津山国夫によって武者小路の時代区分は試みられており、大づかみにはカバーされている。(1) ここでは、本稿が研究対象とする時期について最も詳しく言及している大津山国夫の『武者小路実篤全集　第九巻』（平成元［一九八九］年四月、小学館）「解説」の引用から始めたい（なお、

引用の冒頭は武者小路の自伝『自分の歩いた道』からの大津山による引用であり、引用の文章中には亀井・本多による時代区分についての要約も含んでいる)。

それからしばらくして僕の失業時代が来た。僕は五十近くなっていた。改造からも中央公論からも原稿をたのまれなくなった。世間一般が不景気になったのも事実で、僕はそれまでこっちから原稿を持ち込むことはほとんどしたことがなかったが、だまっていればどこからもたのまれない状態で、僕は原稿を売りつけるためにはじめて雑誌社をたずねたのもその時分だった。／僕は改造や中央公論にこっちからたのむ気にならなかった。僕が自分でたずねる気になったのは講談社だった。講談社だけが左傾していないので、僕のものを喜んでのせてくれたわけだ。(中略)僕は講談社にたのまれて、伝記小説や、伝記類を多く書いたのは、そういう事情があったわけだ。幸い僕の書いた釈迦は評判がよく、百版を重ねる勢いで、僕の失業時代をやっとのり越すことができ、他からも注文されるようになった。(『自分の歩いた道』[2])／／武者小路の作品が「改造」にのらなくなったのは、一九三〇年(昭和五)一一月から三三年(昭和八)三月までであり、「中央公論」は二九年(昭和四)一一月から三二年(昭和七)七月までであった。彼の当時の文章や執筆年表を参照すると、おおまかにいって、二九年から三二年までの四年間をその「失業時代」と見ることができよう。〔略〕文学史は「白樺」時代をすでに終り、プロレタリア文学を基軸として展開する新しい時代に入っていたから、綜合雑誌も文芸雑誌も新進作家たちの作品を競って掲載した。〔略〕いわゆる転換時代、あるいは左傾時代は絶頂期をむかえ、武者小路は一種の「兵糧ぜめ」の被害意識さえ感じていたようである。〔略〕彼は画家への転業を試みたり、日向堂を開店して美術商と出版業に手をそめたりしたが、いずれも成功しなかった。三一年(昭和六)三月、「実篤の仕事を助ける会」(のちに無車後援会と改称)を組織して月一円の後援会員を募ったが、実

効があったらしい気配はない。この年には「高利がしにちかい所」〔傍点は原文。以下同じ〕からも二五〇円くらい借金したという。結局、志賀直哉から二千円借りて急場をしのぐ一方、「キング」をはじめとする大衆雑誌にもっぱら筆をとることになった（以上は『志賀直哉宛書簡』参照）。講談社から出版した『二宮尊徳』は三二年（昭和七）に四七版、三七年（昭和一二）に一〇一版をかぞえた。おなじく講談社から出版した『釈迦』は、ベストセラーになった（「百版を重ね」たのはいつか、まだ調べていないが、四一年に一〇八版を出している）。三二年の年末になって、ようやく志賀にあてて「この頃やつと失業時代を通りすぎた」と報告することができた（「志賀にあてる手紙」重光、昭和8・1）。

亀井勝一郎は、武者小路の一九二六年（大正一五・昭和元）から三六年（昭和一一）までを「伝記の時代」と呼んだ。本多秋五は、おなじ時期を「講談社時代」と呼んだ。内外の聖人、賢者、英雄、巨匠など、説話や歴史に著名な人物たちの評伝、スケッチ、あるいは彼らを主人公とした作品を大量に書いたから、「伝記の時代」であり、これらの作品を講談社から刊行されていた雑誌の「キング」や「現代」に発表することが多く、講談社から出版することが多かったから、「講談社時代」であった。

衆知のように、明治、大正期の彼の関心は、日本よりは世界、東洋よりは西洋の方にもっぱら傾いていた。〔略〕昭和初年代から、彼の関心は日本と日本人の方へ大きく移動した。〔略〕二宮尊徳、大石良雄、宮本武蔵などは、当時の講談社にふさわしい人間像であった。〔略〕本多秋五が、亀井勝一郎のいう「伝記の時代」を「講談社時代」といいかえたのは、武者主義と講談社思想との接近を念頭においてのことであろう。強いられた講談社への一時避難

と、彼の内なる日本開眼と、どちらが先導したかは論証のむつかしい微妙な問題であり、相互の助長を認めるほかにはあるまい。ただ、彼の日本開眼に国粋的な偏愛のなかったことは付言しておきたい。当代においても、釈迦や孔子やトルストイは世界を照らす一等星であり、レンブラントやセザンヌは不朽の巨匠であった。

昭和九年は、武者小路が「失業時代」を乗り越えて約一年が過ぎた頃にあたる。よく売れた『釈迦』の刊行が昭和九年一一月だから、亀井の言う「伝記の時代」・本多の言う「講談社時代」のほとんどの期間は苛酷であったが、昭和九年を含む最後の二〜三年は経済的に一息つくことができた時期だと考えてよいだろう。

小林多喜二が虐殺され、佐野学と鍋山貞親が転向声明を発表したのが昭和八（一九三三）年で、昭和九年になるとプロレタリア文学はすでに退潮局面にあった。また、昭和七（一九三二）年頃から島崎藤村・谷崎潤一郎・正宗白鳥ら大家の活躍はみられ、昭和八年には様々な流派の文学者たちが集結するかたちで『文学界』を創刊して活動を活発化していく。しかし、プロレタリア文学の後退によって文壇内における武者小路の位置が良くなったから「失業時代」を乗り越えることができたわけではない。昭和九（一九三四）年になっても、武者小路と文壇とのつながりは依然として薄いままである。参考までに、『武者小路実篤全集 第十八巻』（平成三［一九九一］年四月、小学館）「作品年表」に記載されている昭和九年分の発表作品を掲載誌・紙別にまとめると、以下のようになる（掲載作品数が多い順・掲載時期が早い順）。

『重光』（重光発行所）二五作品／『新しき村』一九作品／『報知新聞』一八作品／『現代』（大日本雄弁会講談社）六作品／『キング』（大日本雄弁会講談社）四作品／『東京日日新聞』一作品（四日連載）／『塔影』（塔影社）三作品／『新しき村通信』二作品／『女子文苑』（新醒社）二作品／『改造』（改造社）一作品／『婦人公論』（中央公論社）一作品／『通信』（山本書店）一作品／『文芸春秋』（文芸春秋社）一作品／『鶴』（鶴社）一作品／『行動』（紀伊国屋出版部）一作品

／『大法輪』（大法輪閣）一作品／『文芸』（改造社）一作品／『野鳥』（梓書房）一作品
（参考）書き下ろし単行本『空海及びその他』（山本書店）／同『維摩経』（大東出版社）／同『釈迦』（大日本雄弁会講談社）

『重光』は武者小路と長与善郎による二人雑誌、『新しき村』・『新しき村通信』は新しき村の機関誌、山本書店も新しき村でつながりがある山本武夫が始めた出版社なので、これらの媒体に於ける寄稿数は武者小路に対する出版社の一般的な需要とは無関係である。とすれば、武者小路の原稿生活は大日本雄弁会講談社から出ている総合誌『現代』・『キング』、毎週の連載が一定期間継続した『報知新聞』などにより辛うじて支えられていたことになる。[3]

発表作品の内容について見ても、「作品年表」の分類にしたがえば、創作は、小説が「男装した女弟子」（『重光』一月）、「宮本武蔵」（『キング』三月）、「黒住宗忠」（『キング』七月）、「白隠」（『キング』八月）、「悉多太子と五比丘」（『大法輪』一〇月）の五作品、戯曲が「若き大雅堂」（『塔影』六月）一作品、詩が「秋」（『女子文苑』一〇月）一作品のみで、他は随筆・感想・批評等である。創作といっても、小説・戯曲ともに歴史的人物に依拠した作品がほとんどで、宇宙規模の壮大・奔放な構想にあふれる戯曲「人間万歳」（『中央公論』大正一一［一九二二］年九月）、人間の負の心理を徹底して抉り、高い評価を得た戯曲「愛慾」（『改造』大正一五［一九二六］年一月）などを生んだ文学的想像力は行き場を失った形である。武者小路に対する需要は純文学ではなく、大衆的な歴史読み物の方にあった。[4]

小林秀雄は昭和八（一九三三）年五月の『文芸春秋』に「故郷を失つた文学―文芸時評―」〔以下「故郷を失つた文学」と表記〕を発表し、谷崎潤一郎による現代の純文学に対する批判に答えて、次のように述べた。小林のこの文章により、当時の文壇の状況を確認したい。

何事につけ近代的といふ言葉と西洋的といふ言葉が同じ意味を持つてゐるわが国の近代文学が西洋の影響なしには生きて来られなかつたのは言ふまでもないが、重要な事は私達はもう西洋の影響を受けるのになれて、それが西洋の影響だかどうか判然しなくなつてゐる所まで来てゐるといふ事だ。〔略〕私達は生れた国の性格的なものを失ひ個性的なものを失ひ、もうこれ以上何を奪はれる心配があらう。一時代前には西洋的なもの(ママ)東洋的なものとの争ひが、作家制作上重要な関心事となつてゐた、彼等がまだ失ひ損なつたものを持つてゐたと思へば、私達はいつそさつぱりしたものではないか。私達が故郷を失つた文学を抱いた、青春を失つた青年達である事に間違ひはないが、又私達はかういふ代償を払つて、今日やつと西洋文学の伝統的性格を歪曲する事なく理解しはじめたのだ。西洋文学は私達の手によつてはじめて正当に忠実に輸入されはじめたのだ、と言へると思ふ。かういふ時に、徒に日本精神だとか東洋精神だとか言つてみても始まりはしない。何処を眺めてもそんなものは見付かりはしないであらう、又見付かる様なものならばはじめから捜す価値もないものだらう。谷崎氏の東洋古典に還れといふ意見も、人手から人手に渡る事の出来る種類の意見ではあるまい。氏はたゞ私はかういふ道を辿つてかういふ風に成熟したと語つてゐるだけだ。歴史はいつも否応なく伝統を壊す様に動く。個人はつねに否応なく伝統のほん(ママ)とうの発見に近づくやうに成熟する。

日本や東洋との絶縁を宿命と受け止め、西洋化した文化圏としての日本を故郷喪失者として潔く生き抜く志を持ち始めた小林秀雄ら若き知識階級の文学者にとって、日本精神や東洋精神の象徴たちの伝記を書いて収入を得る武者小路こそは最も時代錯誤的な存在と映ったであろう。武者小路は、「シェストフ的不安」・「行動主義」など、当時の文壇のトピックをめぐって表現、応酬する文壇の人間ではなくなっていた。同じく当時の文壇的トピックと無縁であっても、「東洋」・「日本」・「古典」等に回帰する中で「成熟」した小説を説得的に表現し続ける谷崎と武者小路の場所は別であると見られ

ていたであろう。この状況の中で、文学者としての自信喪失・文壇への不満・転業への思いを武者小路は率直に綴っている。『重光』から昭和八年と九年の文章を引用する。

原稿で金をとることは実際いやである。又不自然に思へる。〔略〕原稿で金がとれるのは、僥倖のやうに切りこの頃考へられなくなつた。三千人の本当の読者があれば、そして毎月五十銭の本をその人が必ず買つてくれるときまれば、自分は原稿でくらすのは自然だと思ふが、しかしそれだけの読者をもつ自信は今の自分にはない。それは僕のせい許りとは思はないが、僕の力の不足も勿論あづかつて力があると思つてゐる。／何かいゝ仕事があつたら知らしてほしい（「思ひつくまゝ」。『重光』昭和八年七月）。

僕は文学の仕事をなげすてゝ画許りかいて後半生を終りたくなつてゐる。文学はどうも自分にはぴつたりしなくなつた。小説や脚本をかくことに少しも魅力を感じなくなつてゐる。日本の文壇には僕を奮起させる力はない。何処かに小説を書かうとすると無理がある。画だとさう云ふものを僕は感ぜずにすむ。／脚本もこの頃はかく興味がなくなつて来つゝある。かいても始まらない気がする。僕の頭はいつのまにか腕よりさきに画家になつてしまつた。

農村問題についても僕はつかつてくれる人があれば働きたいとは思つてゐる。／僕は自惚れ強い、誰にも負けることの嫌ひな男にはちがいない（ママ）が、慾望は少ない、自分の利害にはわりに早く超越出来る。／公平に世界の利益も考へられ、日本国の利益もその内でうまく考へられ、国民の生命のことも心から同情して考へられる質のやうに自分では思つてゐる。〔略〕この僕と云ふ男は気が多い男で、文学で飯が食へなければ代議士にもなりかねない男なのだ。宰

相にも是非なつてくれとからかはれても、ニコ〳〵しかねない男なのだ（以上二つの引用は「面白半分面黒半分」。『重光』昭和九年二月）。

文壇との隔たりが生じただけではなく、文学に対する創作欲さえも喪失しかけている中で、彼の揺れる思いは絵画、実業、そして政治にさえ拡散し始めている。大津山は日本への志向を新たな方向性として指摘していたが、当時の武者小路の全体像を描くためには日本への志向を加えただけでは充分とはいえまい。

しかし、文壇と武者小路との関係は薄いながら、無関係と断言することもできない。小林秀雄は「故郷を失つた文学」を発表した七ヶ月後にあたる昭和八（一九三三）年一二月の『文学界』に「手帖」と題する文章を寄せている。時代に充満する「不安」の中で、小林は主として「実行」の観点から武者小路の『論語私感』を肯定的なものとして受容している。

武者小路実篤氏の「論語私感」を読む。いかにも天真爛漫な気持ちのいゝ本である〔この一文は初出のみ〕。いつもの癖で漫然と読み始めたのであつたが、二本目の煙草が終るころから、知らず知らずのうちに自分がいゝ気持ちになつてゐる事に気がついた。のろりのろりと読み進んで、読み終つた後までもいゝ気持ちがつゞいた。／孔子の言葉を、はじめて熟読した機会に、彼の言葉のもつ美しさについて色々思ひをめぐらした。長い年月を生き長らへた言葉のなんという簡明、なんといふ率直、あらためて驚く事はない、だがやっぱり私は驚く。／驚くのは兎も角気持ちのいゝ事だが、驚くとともに、かういふ簡明率直な言葉は、私達の精神の疲労してゐる様を否応なく反省させる。つまり思ひ廻らしてゐるうちに刺戟が強すぎると感ぜざるを得ないのである。〔略〕惟ふに彼の言葉の真義は実行の世界に没して居るが為である。彼の言葉の意味する最も難解な部分は、彼が実行に依つて、実行に依つてのみ解決した

さういふ言葉だからだ。さういふ言葉を聞く機会は稀である。さういふ言葉を吐く人はなほ稀である。私達は自ら省て、どれほど実行から遊離した言葉の世界に溺れてゐるかを知つて不安となり、理論と実践との或は存在と価値との弁証法的統一などといふ最後の空論をあみ出してゐるではないか。／少数の表現上の天才等の御陰で、私達は遂に行為から全く遊離した広大な言葉の独立した世界を持つにいたつた。かういふ世界をほんたうに生き切れた少数人はいゝが、御蔭でこの世界を享楽する才能を育てたに過ぎぬ多数の人達は、その果ない享楽によつてどれ位無益に傷ついて来たであらうか。

『論語私感』は長い助走を経たのち、[5] 昭和八（一九三三）年一〇月に岩波書店から出版された、よく読まれた本であった。『重光』昭和八（一九三三）年一一月号の「いろ〳〵のこと」には「『論語私感』はおかげでわりによく売れてゐます。僕のかいたものゝ内で自分では一番すきなものかとも思つてゐます。少くも本になつて今度程よみなほした自分の本はありません。尤もそれは孔子の言葉があるからですが」、「本は少し切りつくらなかつたので今増版中です。／僕は今迄自分の考へ許りをかいて来た傾がありますが、之からいろ〳〵の人の考へを通して自分の考（ママ）をのべたいと思つてゐます。／支那や日本にはいろ〳〵いゝ人も、いゝ本もあると思ひます。それを読んで、読まない人々に紹介したいとも思つてゐます」とある。新心理主義や自意識などの問題系を経てきた日本の文壇にとって『論語私感』は彼岸の文学ともいえるものであったが、この執筆経験が武者小路自身の自己主張を鎮め、思考が他者にひらかれる契機となったことは興味深い。『論語私感』が小林秀雄の琴線に触れたのも、武者小路が『論語』と協働したものだったからであろう。

「手帖」は「故郷を失つた文学」と同じ構図で書かれていると見ることができる。「手帖」がとりあげる孔子の言葉は「故郷を失つた文学」の谷崎潤一郎の位置にほぼ対応している。しかし、「故郷を失つた文学」においては谷崎を特別な存

在として別枠に囲い、「西洋文学の伝統的性格を歪曲する事なく理解しはじめた」現代の若き文人の感受性を積極的に受け止めようとしていたのに対し、「手帖」では西洋化した現代的な感受性に対する信頼は大きく後退している。「どれほど実行から遊離した言葉の世界に溺れてゐるかを知つて不安となり」、「精神」の「疲労」にさいなまれながらも「存在と価値との弁証法的統一などといふ最後の空論」に賭けようとする「私達」のにがい思いが滲んでいる。小林の「いゝ気持ち」に武者小路の力がどこまで寄与しているのかはわからない。また、「私達」を「遂に行為から全く遊離した広大な言葉の独立した世界」に連れていってくれた「少数の表現上の天才」、「かういふ世界をほんたうに生き切れた少数人」とは、「理論」に傾斜した「実行から遊離した言葉の世界に溺れてゐる」現代の表現者たちにおける数少ない成功者を示すのだから、武者小路はもちろんここに含まれることもない。しかし、「天真爛漫」さ・「簡明率直な言葉」・「実行に依つてのみ解決した」「言葉」を、『論語私感』を含めた武者小路による偉人伝群は持ってもいる。小林秀雄における武者小路実篤の位置は、意外に谷崎潤一郎に遠くないかもしれない。もちろん、これは小林を補助線に使った想像による見立てである。現実的には、昭和九年の武者小路は文壇から遠く離れた場所にいた。

次節からは、武者小路の昭和九年の位相を具体的に探っていこう。この年の書き下ろし単行本が三冊とも仏教関連書であることをふまえて、まずは昭和九年における仏教の状況を確認し、その中における武者小路の位置をもとめることとしたい。

二、「仏誕二千五百年」としての昭和九年

昭和九年は「仏誕二千五百年」の記念の年であった。現在は歴史知識として共有されていない「仏誕二千五百年」について、新聞資料を引用しながら紹介しよう。『読売新聞』は昭和九（一九三四）年一二月一日（土）、四日（火）、五日（水）

の三日間、仏教学者高楠順次郎による「仏誕二千五百年／★全仏教徒に訴ふ」【上】【中】【下】をそれぞれ掲載している。

昭和九年を以て仏誕二千五百年とすることは、仏教の世界的進出を企図する為の便宜に出でたのである。歴史的根拠の稀薄なりと見られて居る大乗一切経の中に、南伝一切経の一部たる善見律を有し、南伝仏滅紀元に最も近き衆聖点記を有して居ることは、世界の学者の驚異であるのである。何となれば、この衆聖点記の伝説は実に仏涅槃の時まで遡る伝説である。涅槃の時まで明白に遡り得る伝説は容易に得らるるものでない。この系統、正しい伝説は、世界的に、政治的にこれを採択し、これを利用する位の雅量は仏教者にはなくてはならぬ。斯る正しい伝説を有することは、日本仏教の誇りであることを知らなくてはならぬ（【上】）。

仏誕二千五百年祝典プログラム／◇記念講演／（一）本日午後六時本郷帝大仏青会館、講師は井上哲次郎、正木直彦、矢吹慶輝、白鳥庫吉、宇野円空の諸博士／（二）四日午後六時九段軍人会館、講師は高楠順次郎、椎尾弁匡、三上参次、姉崎正治、小野清一郎の諸博士／◇仏教学大会／二日午前九時—四時、帝大法文経二号館教室で専門学徒四十名の新研究を二部に分れて発表前に自由討論（傍聴自由）／◇記念祝典／八日午後四時帝国ホテルに学界、教育界、政界、財界等の名士約千名招待—法要（佐伯法隆寺貫主導師）、欧米仏教学者業績表彰（英、白、仏、独、露、米人八氏へ記念章、感謝状を当該国駐日大使を通じて伝達）晩餐（印度式精進料理）等／以上の外に記念仏教論文集、記念講演会、記念学会紀要等を出版する（【上】）

現在以上に釈迦の誕生年について確定的な情報を持っていないこの時代において、釈迦生誕二五〇〇年をあえて特定

し、記念しようとすることはさほど賛同を得られていないようである。昭和九（一九三四）年一二月四日（火）の『読売新聞』に掲載された「風聞帳」には、「仏誕二千五百年記念学会の催しが内容的にどれ位の価値と普遍性とを有するかは別として、会長の井上博士始め真面目一徹（？）の学者達が「こんなことするのは生れて初めてだ」と私語しつゝ寄付金の斡旋に奔走したのは全くいぢらしかつた」とある。引用文からも高楠自身の自信の無さがうかがえるが、この年の一一月に出版された武者小路『釈迦』（大日本雄弁会講談社）の「序」を読めば、武者小路はこの認識を一定程度共有していたことがわかる。「序」の末尾近くの文章を引用する。

僕は今年釈迦が生れて二千五百年と云はれてゐることと、今年仏教が盛んになつて来たと云ふ事実から云つても、釈迦のいゝ伝記が出るべきだと思つてゐる。しかしさう云ふ時にこの本が出るだけに、僕としてはなほいゝものが書きたかつた。／僕は流行に乗ることはあまり好かない男なので、之に流行がすぎたあとでも厳然とした存在価値のあるものをかいておきたかつた。

武者小路の「仏誕二千五百年」に向かう態度は微妙である。恣意的に設定された記念年に対しては伝聞的に受け容れ、その気運の中で「厳然とした存在価値のある」「釈迦のいゝ伝記」を書き残そうとして書き上げたのが『釈迦』であり、仏教の記念年を祝う意思、流行する仏教に追随する意思はなくとも、その流れに乗ずるように仏教関係の著作を数多く送り出したのが武者小路の昭和九年であった。

三、大東出版社『仏教聖典を語る叢書』の〈看板〉執筆者として

昭和九（一九三四）年七月から昭和一四（一九三九）年七月まで、『仏教聖典を語る叢書』全十五巻が、大東出版社から刊行された。武者小路実篤は第二回配本の第六巻『維摩経』[6]を担当するのであるが、武者小路による『維摩経』を検討する前に、大東出版社と『仏教聖典を語る叢書』について説明しておく。

大東出版社は、東京三ノ輪にある「投げ込み寺」と呼ばれる浄閑寺の僧侶で仏教研究者である岩野真雄により、大正一五（一九二六）年に創業された仏教書を中心とした出版社で、『国訳一切経』を昭和三（一九二八）年から六十年かけて完成させた（完成は真雄の没後）。昭和九年当時、大東出版社からの仏教関連書の出版数は多いが、本叢書はそのなかでも中心的なものであったと考えられる。真雄の妻である岩野喜久代の随筆集『大正・三輪浄閑寺』（昭和五三［一九七八］年六月、青蛙房）、『夕日に向かって』（昭和六三［一九八八］年九月、青蛙書房）などによって、大東出版社設立の経緯を少し知ることができ、岩野夫妻と「仏誕二千五百年」記念行事の中心人物のひとりであった高楠順次郎との深い縁、大東出版社と高楠との深いつながりも確認できる。

当時の武者小路は大東出版社と浅くはないつながりを持っていた。『維摩経』の「本篇」「巻の下」の末尾において、武者小路は小さい活字で以下のように記している。

この本文をかく為には殆んど全部、深浦正文氏の訳を参考にした。処々自己流の解釈があるから、まちがへた処が万一あつても、それは僕の無学のせいで、深浦氏の責任ではないが。解説なぞも同氏の本に全文よつた時が多いことを識し、感謝する。国訳一切経の経集部六として大東出版社から出てゐる本だ。／それから現代意訳の維摩経（岩野真雄氏）と、新編仏教辞典を参考にした。このことを白状し、感謝する。

武者小路が執筆にあたって参照した、深浦正文訳も大東出版社発行、現代意訳の『維摩経』（『現代意訳 維摩経・解深密経』大正一一［一九二二］年六月、仏教経典叢書刊行会）も岩野真雄の執筆、さらには『新編仏教辞典』（昭和八［一九三三］年七月）の編纂兼発行者は岩野真雄、出版元は大東出版社である。[7] 武者小路は岩野真雄、大東出版社を中心とした仏教関係者のネットワークの中に身を置いていたために、「仏誕二千五百年」を受け入れる際の抵抗感が減じたとも考えられる。

さて、私の手元にある、『仏教聖典を語る叢書』予約会員募集のためのパンフレット表紙には「仏誕二千五百年／記念出版」、「文壇の巨匠、論壇の権威、教界の新鋭、協同の陣を張って清新自由なる仏教の真髄を説く!!」、「二千五百年の殻を破り、生々潑溂たる仏教の新天地は拓く。親しみ難き経典は初めて完全に現代人のものとなり、直ちに魂の慰安所、活力の源泉となる」と、「仏誕二千五百年」を機に、狭く閉じた仏教界を著名な文学者たちの力を借りて解放し、現代人にまで仏教の経典を届けようとする熱気があふれている。パンフレット表紙裏の下部には「刊行規定」が掲載されているが、上部には以下の文章がある。

> 終に仏教経典（ママ）は斯様に文壇論壇の名家、教界新人によつて現代化され、あだかも文芸的作品を読む気分で楽にこれが味はゝれるやうになつた。／現代人にして仏教を知らぬのは最大恥辱で時代遅れの甚だしいものといふことになつた。今日本には所謂読書階級は壹百万と見て、此の叢書は少くも百万部は普及されるべきものと信ずる。

表紙に出ていなかったキーワードとして、「百万部」・「文芸作品を読む気分」などが挙げられよう。大正時代の後半に宗教小説が流行したことがあるから、[8] 仏教が文学と結びつくことで数多くの読者を獲得できることは充分予測がついたで

あろう。「仏誕二千五百年」を別にしても当時は仏教ブームが起きており、出版者側にとっては、「百万部」はまったく根拠がない数字ではなかっただろう。

「1」と頁番号が付された頁には「本叢書の特色」として以下の四項目が掲げられている。

◇仏教経典（ママ）の代表的なるもの、並に本邦高僧の中心論作を選びて拾五巻に配す。／◇担当執筆諸家は現代日本に於ける文壇、論壇の権威、教壇の俊英。／◇執筆方針は従来の仏教専門家による教条宗義を必ずしも踏襲せず、その型の如き観点、解釈を脱却して活殺自在、その中より清新自由なる着眼と解釈とを以て解明す。全文書下し。／◇執筆方法は大体に於てその経論の主意が全然現代の文字と文とによりて記述されるが、経論の長短により或は講義風に、或は評論風に、或は随筆風に、夫々その全体が総観される事となるので、その程度は一に執筆諸家の自由裁量による。

四項目のあとには、「本書に収むる内容を以て現代仏教の全班を味識することが出来る。而して之を以て他の経論を見る時は、自らそれらの真意を会得し得る事とならう。要するに本叢書は新しき観点に立つた仏教を識る基本的尺度である」とある。実際に本叢書全体を通覧してみても、やはりあくまで仏教経典の解説書であり、専門書の領域にとどまる内容なのだが、「型の如き観点、解釈を脱却して活殺自在」に、「執筆諸家の自由裁量」により「全然現代の文字と文とにより記述される」点が強調されている。

「2」頁から「3」頁にかけての見開きには、「『仏教聖典を語る叢書』刊行趣旨」が発行者の岩野真雄によって書かれている。後半部分を引用する。

然し今日、此の仏教は、寺院と、儀式と、墳墓と、家々、仏壇とによつて辛くもその形を保つてゐるだけなのは、何としても残念である。我々は此の仏教を真に社会大衆のものたらしむるために、先づ僧と俗との別を破り、同時にその教への基である経論の現代語への書き改めを常に願ひとしてゐた。／今図らずも本叢書の企てが文壇論壇諸名家の賛助を得、それらの士の努力によつて現代人としての感覚と思索とによる自由な解釈と表現とによる経論の書き改めが実行さるゝ事になつた。即ち文壇論壇の権威、教界の新鋭が夫々得意の経論を担当して、講義にして講義に非ず、随想にして随想にあらず、祖述して而も独自の境地を示さるゝことゝなつた。／勿論之を今迄の教条宗義より見たならば異論を挾むべき点もあらう、然し此の叢書の第一目的とする所は古き解釈から一歩も出で得ぬ教条宗義の中より、筆者の体験と思想と感覚によつて新しく何物かを描き出す所にあるので、全経論の中、たとひ一字一句たりとも之が新生の意義を以つて描き出されたならば——時に之れによつて全体の構図思想に一大変動を来すなきも保し難い——それだけでも本叢書の重大な役割の一は果たされるわけである。／仏教は二千五百年にして遂にその殻を破つた。此の叢書によつて今後陸続として社会大衆の中に、自由に経典が読まれ味はるゝ事とならう。此の意味に於て本叢書執筆諸家の努力が酬ひらるゝならば刊行者の望みは満さるゝのである。願くは此の新理想による企画に対し江湖諸賢の甚深なる理解と援助とを賜らん事を。／昭和九年六月　刊行代表者　岩野真雄識

パンフレットの中には、巻別執筆者一覧も掲載されており、それを以下に示すが、実際に刊行された順と時期、タイトル等に変更があった場合には、これについても記す（奥付における巻数表記は「第壹巻」「第拾貳巻」等の表記をしているが、ここでは便宜上一般的な漢数字を用いる。配本回数は、奥付の発行年月日により瀧田が数えたもの）。

（第一巻）山辺習学『仏教経典（ママ）を語る』＊第一回配本（昭和九［一九三四］年七月五日）
（第二巻）友松円諦『阿含経』＊第七回配本（昭和一〇［一九三五］年二月一〇日）
（第三巻）宮島資夫『華厳経』＊第九回配本（昭和一〇［一九三五］年三月二〇日）
（第四巻）佐藤春夫『観無量寿経』＊第六回配本（昭和一〇［一九三五］年一月二〇日）
（第五巻）真野正順→加藤咄堂『勝鬘経』＊第一四回配本（昭和一一［一九三六］年一月二〇日）
（第六巻）武者小路実篤『維摩経』＊第二回配本（昭和九［一九三四］年七月二五日）
（第七巻）岡本かの子『観音経』→『観音経＝附法華経＝』＊第四回配本（昭和九［一九三四］年一〇月一五日）
（第八巻）高神覚昇『般若経』＊第一二回配本（昭和一〇［一九三五］年九月三〇日）
（第九巻）藤秀璻『涅槃経』＊第八回配本（昭和一〇［一九三五］年二月二〇日）
（第十巻）松岡譲『仏所行讃（釈迦伝）』→『釈尊の生涯＝仏伝と仏伝文学＝』＊第一〇回配本（昭和一〇［一九三五］年六月二〇日）
（第十一巻）三木清『起信論』・稲津紀三『中論』→加藤咄堂『起信論』＊第一五回配本（昭和一四［一九三九］年七月一五日）
（第十二巻）菊池寛『弘法大師の宗教　「十住心論」を読みて』→『十住心論＝弘法大師と其宗教＝』＊第一一回配本（昭和一〇［一九三五］年八月二〇日）
（第十三巻）倉田百三『法然・親鸞聖人の宗教　「一枚起請文・歎異抄」を読みて』→『一枚起請文・歎異鈔＝法然と親鸞の信仰＝』＊第三回配本（昭和九［一九三四］年九月一五日）
（第十四巻）中村吉蔵『道元禅師の宗教　「正法眼蔵」を読みて』→『正法眼蔵＝道元禅師の人格と宗教＝』＊第一三回配

本（昭和一〇［一九三五］年一二月二五日）

（第十五巻）室伏高信『日蓮聖人の宗教「立正安国論」を読みて』→『立正安国論／を中心に日蓮の人と宗教を語る』

＊第五回配本（昭和九［一九三四］年一二月一五日）[9]

執筆者には文学者以外もいるので、執筆予定者を含め、執筆者それぞれの職業を巻数順に記しておく。山辺習学＝仏教学者・僧。友松円諦＝仏教学者。宮嶋資夫＝小説家。佐藤春夫＝詩人・小説家。真野正順＝宗教学者、僧。加藤咄堂＝仏教学者、教化運動家、作家。武者小路実篤＝小説家、劇作家、詩人。岡本かの子＝小説家、歌人。高神覚昇＝仏教学者、僧。藤秀璨＝僧、仏教学者。松岡譲＝小説家。三木清＝哲学者。稲津紀三＝インド哲学者。菊池寛＝小説家、劇作家。倉田百三＝劇作家、評論家。中村吉蔵＝劇作家、小説家。室伏高信＝評論家。全十七名のうち、仏教を含む宗教関係の学者・僧が七名、仏教や宗教には限定されない学者・研究者が一名、小説家・評論家等の著述業が九名。この比率を参照するだけでも本叢書が仏教に狭く限定されたものでないことがわかる。

また、配本順を見ていて気づくのは、全体のまとめとしての役割をもつ第一回配本の山辺習学を別とすれば、第二回＝武者小路、第三回＝倉田百三、第四回＝岡本かの子、第六回＝佐藤春夫、と文学者担当巻を早めに配本し、文学の読者層にまで講読を推奨しようとする意図である。ちなみに、パンフレットには、武者小路『維摩経』、岡本かの子『観音経』、友松円諦『阿含経』の順で組見本が三つ（一頁ずつ）掲載されており、文壇的な人気は低いはずの武者小路は本叢書の〈看板〉としての役割を期待されていることがわかる。武者小路に寄せる期待を示す文章は、武者小路『維摩経』に付いている『仏教聖典を語る叢書月報』「第二号」にも見られる。

〔略〕本叢書は或る見地より見て仏教界破天荒の盛観である。一流の各執筆者のメンバーを集めし苦心、発企の断行もさぞやと推察せらる。何卒執筆者も編輯者も一般大衆読者の願望に副ふべく努力せられん事を希念して止まない。今第一巻を手にしてその浄々しい装幀に包まれた、仏教聖典の一般的認識を瞭らかにせるものはあるが、本叢書の興趣は余り見れ(ママ)ず、第二巻武者小路氏の維摩経は如何に此に映現せるか、手に汗してその出来るのを待望してゐる。待ち遠しき事よ（「読者の声」欄。「東京、豊島生」）。

僕はいづれの宗派にも属してゐない。どうも昨今の所謂職業僧は虫がすかん。然し坊主憎くけ(ママ)りや袈裟まで云々と云ふのではない　この時局に日本精神の再検討が行はれてゐるが、知らず〳〵の間に大和魂を培かつてきてくれた仏教そのものには敬意を表してゐる。今回の企(ママ)には色々注文はあるが、いづれ武者小路氏のを手にしてから述べるが、仏教は必ずしも職業僧の占有物でないと云ふことを、社会に知らしめてくれたことに対して感謝する（「読者の声」欄。「東京、都築生」）。

▼第二回配本が案外早く出来た事を全読者諸賢と喜びます。武者小路先生に厚く御礼を申上げます。▼維摩経は有名なもので、古い型の経文の読める人には本当にいゝお経なのですがまだ一般には殆んど読まれてはゐませんでした。▼此の維摩経を見ると、前書き、あと書きは勿論の事、本文もよくその含蓄を味はつて行くと自然に心が広くなつて行く気がするものです。此のやうに六ヶ敷(ママ)しいお経を知らず〳〵の内に読み過して行くなどは全く未曾有の事です（「編輯後記」。署名なし）。

『日蓮』（昭和四［一九二九］年六月、改造社）、『二宮尊徳』（昭和五［一九三〇］年一二月、大日本雄弁会講談社）、『井原西鶴』（昭和七［一九三二］年一月、春陽堂。これは伝記やエッセイではなく小説）、『大石良雄』（昭和七［一九三二］年六月、大日本雄弁会講談社）、『論語私感』（昭和八［一九三三］年一〇月、岩波書店）と、昭和五年ぐらいから武者小路による著作単行本は偉人伝が中心になっており、特に『二宮尊徳』・『大石良雄』・『論語私感』などはよく売れたので、[10] 文壇的な人気の低さとは別に、本叢書の人気を牽引するほどの期待を寄せる根拠はあった。

四、武者小路実篤『維摩経』
――大乗仏教の思想と武者小路の思想――

在家の仏教徒でありながら、釈迦の重要な弟子たちと問答をおこない、見事に論破していく維摩詰が、小乗仏教的な思考を厳しく否定し、大乗仏教の思考に導く戯曲的（文学的）な『維摩経』を武者小路流に解説した本書は、芸術社版・新潮社版・小学館版いずれの武者小路の全集にも収録されていないが、実はロングセラーとなった作品である。『仏教聖典を語る叢書』の一冊として大東出版社から出た後にも、昭和一七（一九四二）年六月には日本評論社から『東洋思想叢書』の一冊として、昭和三一（一九五六）年三月には角川書店から角川文庫の一冊として出版された。調布市武者小路実篤記念館データベースによれば、角川文庫版『維摩経』は昭和四三（一九六八）年六月に第一一刷が発行された後（ほぼ毎年刷りを重ねている計算になる）、昭和四四（一九六九）年六月、昭和四五（一九七〇）年一〇月にも新たに刷り直されており、少なくとも一三刷を重ね、長い期間にわたり読者が存在していたことがわかる。

全四〇六頁からなる『維摩経』を詳しく説明することはできないが、大まかな構成のみは記しておこう。巻頭の「著者の言葉」のあと、以下のように続く。「前篇」一八章〔一頁～五一頁〕・「本篇」（「巻の上」一四章〔五三

頁〜一六七頁）、「巻の中」一五章〔一六八頁〜二六三頁〕、「巻の下」九章〔二六四頁〜三一六頁〕）・「後篇」（「維摩経を読む」＝「序」〔三一七頁〜三一九頁〕、「形式に就て」二〇章〔三一九頁〜三三九頁〕、「内容に就て」二三章〔三三九頁〜四〇六頁〕）によって構成されている。「前篇」は導入や前置き、「本篇」が中心となる解説部分で、「巻の上」では維摩詰を見舞う者が文殊菩薩（本文中では「文殊師利」）に決まる前まで、「巻の中」で文殊菩薩が登場し維摩詰との問答が始まり、「巻の下」では衆香国の菩薩の訪問を受け、維摩詰の家から釈迦のいる場所へ飛躍し、維摩詰が妙喜国出身だったことが明かされる。「後篇」の「形式に就て」では主として形式上の特徴について、「内容に就て」では武者小路が『維摩経』を通して伝えたいことが述べられる。

「著者の言葉」と「後篇」「内容に就て」の末尾近くの二二章「衆生成就」から引用して、全体の内容をとらえる参考としたい。

> 僕は、宗教は自己完成、人類完成を目ざす人間の、内心の要求から出たものと思つてゐる。／かくてそれが完成した時、すべての川が海に入った時であり、すべてが虚空に帰した時であると思ふ。満足し切つた形である。落ちつくべき所に落ちついた形である。〔略〕かう云ふ考へ方をもつてゐる自分は維摩経を読んで偉大なる知己に逢つたやうな気がした。この経も、僕には自己成就、衆生成就の経のやうに思へる。実際、衆生をはなれて個人の完成なく、個人をはなれて衆生の完成はない。この二つの関係を、この経をかいた人はよく知つてゐるやうに思ふ。その点当然であるが不思議に思つた。そしてそれ等のものが完成した曙（ママ）、空（みそら）〔ルビは原文〕の如き世界に入つてゆくことも僕は不服なく、賛成するものだ（「著者の言葉」）。

彼は涅槃に安住するのさへ喜ばない。／そして衆生と疾み、衆生の病気や、苦しみをとりのぞき、そして法をとき、衆生を成就しやう(ママ)と云ふのだ。／この本願を、僕は人類の意志だと思つてゐる。利己的で人がなくなるに従つてこの本能が表面に出てくるのだと思つてゐる。／この本願を目ざして進むことが、一番心のおちつくやうに人間はつくられてゐると僕は思つてゐる。〔略〕なるべきことをせずに心のよろこびをぬすみ取らうとするのは、罰を受けないことはむづかしい。／この経の作者は本能的にこれを知つてゐる。だから衆生疾む、故に菩薩も疾むと云ふのだ。／皆が健全に生きられる時は、菩薩は疾むことがないのだ。だから彼はすべての人が正しく健全に生きることをのぞむのは当然だ。／この方面からこの経を見る時、同感する処が多いのだ。／野狐禅は個人としての人類へたいする義務を果さずに、涅槃だけをぬすみ取らうとする。この経はさう云ふ人間をやつけてあます処がないと云へる（「二十二、衆生成就」）。

冒頭にある「著者の言葉」と末尾近くにある「衆生成就」で共通しているのは、衆生と離れてみずから悟りを開きさえすればよいという小乗仏教的な（非大乗仏教的な）態度ではなく、自己完成と人類完成、自己成就と衆生成就、人類の意志にしたがった生活と個人の心の平穏、それぞれが表裏一体、不可分な関係にあるという認識であり、この基本的な『維摩経』理解には大きな問題はないと考えられる。しかし、小さな問題があるのは確かである。武者小路の『維摩経』は長く読み継がれてくる中で、著名な仏教研究者からも言及されている。ここで、長尾雅人と釈徹宗のコメントを引用する。

ずっと以前、武者小路実篤という人の書かれたものを読んだことがありました。維摩を友人扱いし、武者小路さんらしい奔放な言い方で評釈をしていて、たいへん面白いのですが、誤解や間違いもかなりあったと記憶します。あま

りお勧めしたいとは思いません（長尾雅人『『維摩経』を読む』[11]）。

仏教経典というと釈迦の難しい教えが書かれている印象をおもちでしょうが、大乗仏教の経典には物語性の高いものも少なくありません。中でもこの『維摩経』は作家の武者小路実篤や仏教学者のラモットをはじめ、近代知性さえも魅了するだけの力があります。市井の在家仏教者（実は妙喜国の住人であったという種明かしもありましたが）である維摩を主人公に設定して、十四場面のドラマ仕立ての中で、仏国土が語られ、菩薩道が語られ、慈悲が語られ、空が語られていく。数ある大乗仏典の中でも突出した魅力をもっているといえるでしょう（釈徹宗『NHK100分de名著　維摩経』[12]）。

「型の如き観点、解釈を脱却して活殺自在」に、「執筆諸家の自由裁量」により「全然現代の文字と文とによりて記述され」てよいという『仏教聖典を語る叢書』の趣旨からすれば、長尾のような仏教学者が専門家の立場から厳密に「誤解や間違い」を指摘するのは筋違いともいえるが、「自己完成」や「人類」などの武者小路的人生観のキーワードに基づいた大乗仏教理解、『維摩経』理解に偏りがあるのはいうまでもない。また、釈がいう、物語性の高さを備えた経典への共感という点からいえば、近い時代において『維摩経』に関心を寄せた文学者、川端康成・宮沢賢治・岡本かの子に比べた時、宗教的共感が強い宮沢賢治・岡本かの子よりも、芸術的共感が強い川端康成の方に近いといえるかもしれない。[13]

長尾が指摘する武者小路版『維摩経』における「誤解や間違い」はどのあたりにあるのだろうか。その所在を確認するため、釈徹宗による『維摩経』のまとめの文章を参照しよう。釈は『NHK100分de名著　維摩経』「第4回　あらゆる枠組みを超えよ！」の中で、以下のようにまとめている。

◆すべてのものは要素の集合体に過ぎず、絶えず変化しながら関係性の中で成り立っている。それが存在や現象の本性であることを覚知することで、存在や現象にしがみつかないように、執着や固着しないようにする道を歩んでいく。この立場に立てば、すべての活動は「空の実践」となる。／／◆なにごとにもよらずに単独で成立しているものはこの世には存在しない。すべてのものは関係性の中で成立している。だから、他者への慈悲の心と活動は、自分の悟りへの道である。すべての人々がそのような道を歩めば、仏教が考える理想の国（仏国土）となる。／／◆「世俗・悟り」「善・悪」といった二項対立の考え方につまずいてしまうと、怒りや憎悪や差別や排除が生じる。自分の都合というフィルターや枠組みを通さずに認識すれば、平等な世界が見えてくる。／／◆世俗を嫌悪して聖なる世界を希求しても、どこまでいっても世俗なのである。だから、むしろこの世俗のど真ん中を生きる道を歩む。とらわれたりかたよったりすることなく、世俗の中を生きる。それが究極の仏道である。／／こうして、『維摩経』は読む人を振り回しつつも、随所に仏教の基本や、大乗仏教の理想を説いているのです。

釈による理解は、変化、流動、循環、混沌、相対主義、そして二項対立的思考の否定を大きな特徴としており、その中核に空の概念が置かれていることがわかる。すべての実践がつねに空を含むことにより、理想や平等がほのかに垣間見えてくるという世界観だ。武者小路は「自己完成、人類完成」は「すべてが虚空に帰した時である」、「空（みそら）の如き世界に入つてゆくことも僕は不服なく、賛成するものだ」と書いてはいるが、「自己完成」という小乗的発想、「個人としての人類へたいする義務」という社会的責務感、「人類完成」や「人類の意志」という言葉にみえる進化論的・成長志向のポジティブなイメージなどは、武者小路の思想によって変形・付加されている。武者小路は『維摩経』固有の特質や輪郭を客観的

に示そうとはせず、むしろみずからを触媒として活用することに積極的であった。そして、仏教学者の長尾雅人が寄せた批判とは異なり、『維摩経』発行前に武者小路に期待を寄せた大東出版社および読者にとって、この執筆姿勢こそが実は理想的な態度であった。「一般的認識を瞭らかにせる」だけでは満足せず、本音・実感に届く解説をもとめる「豊島生」の要求、無宗派で職業僧を毛嫌いし、仏教を広く社会に開かれたものにしてほしいという「都築生」の要望に対して、武者小路の執筆態度は最も好ましいものであったとさえいえるだろう。文壇からは縁遠くなった武者小路ではあるが、同時代における仏典啓蒙書の領域においては非常に高い需要をもつ執筆者であったのだ。

次節では、このような武者小路の位相を理解するため、昭和九年の仏教界の状況を探る。

五、昭和九年の仏教界における問題系

昭和九年の仏教界の俯瞰的展望を得るために、『読売新聞』昭和九年一二月八日に掲載された「教界野人」（筆名か）による「昭和九年の宗教界 得意の仏教界【中】」、越智道順『仏教法政経済研究所モノグラフィー（第十輯）』『宗教復興論』概観 附「宗教復興論」文献』（昭和九［一九三四］年一二月三〇日、仏教法政経済研究所）「第一、所謂「宗教復興」に就て」「一、「宗教復興」の諸現象」[14]、二つを続けて引用する（説明の便宜のために、資料をそれぞれ〈A〉・〈B〉とする）。昭和九年の仏教界における主要なトピックとして挙げられている（資料〈B〉は宗教全体についてのまとめであるが、中心は仏教である）のは以下のとおりである。

〈A〉〔略〕仏教界は実に素晴らしかつた。外観して宗教復興即仏教復興と云ふも決して不都合ではないであらう。／左にその主なる出来事を書きとめて見る。／一、仏誕二千五百年問題〔傍線は引用者による。以下同じ。〕—これ

は仏教学界の元老たる高楠順次郎博士によつて、今昭和九年四月八日を、仏誕二千五百年と推定され、その祝典を全世界の仏教徒挙つて行はうと云ふのであつたが、日蓮宗、真宗、臨済宗等大宗派側の反対に遭つてつひにお流れとなつた。／二、弘法大師一千百年遠忌法要―これは高野山金剛峰寺の大法要（四月二日から五十日）を始め、全国大小幾多の関係寺院を中心に行はれたもの。近年一宗祖の遠忌やこれに因む催しで、これほど一般世人の関心をそゝつたものは先づ無いと云つてよろしい。／三、第二回汎太平洋仏教青年大会―ハワイ、アメリカ、シヤム、インド、ビルマ、支那、濠州等々汎太平洋沿岸の青年仏教徒が七月十八日から数日間東京、京都を中心に会合したもの。これは内容が国際的だつただけに、種々の意味で各方面から注目されたが、大会そのものは謂はゆる宣言、決議以外にさして見るべきものがなかつた。けれ共これが齎らした無形の副産物は僅少でなかつたと云はる（ママ）／四、ラヂオの聖典放送―これは四月中旬から開始されたが、その処女放送を承つた友松円諦最も人気高く、竟に「全日本真理運動」を結成するに至つた。／五、仏誕二千五百年記念学会―四月八日、宗門側の反対で一敗地にまみれた仏教学者達が、今秋井上哲次郎博士を会長として結成したもので、十二月一日から数日間、大々的に講演会、祝典等を行つてあツ晴れ学者の見識と熱意を天下に示したことは先刻御承知の通りである。／大体以上のやうなことがその代表的出来事であり、これらが仏教復興の表面の立役者だつたと思はれるが、中でも弘法大師とラヂオと汎太平洋仏教青年大会の反響は大きかつた（教界野人「昭和九年の宗教界 得意の仏教界【中】」）。

〈B〉〔略〕「仏教復興」に先駆する所謂「宗教復興」の諸現象について、諸家の挙げてゐる処は大体次のやうである。／（1）ラヂオ聖典講座の新設とその恒常的設置。と同時に諸講師の放送が聴講者の心をひき、意外な好評を呼びしこと。／（2）諸新聞（大朝、大毎、東日、報知、読売、国民等）の宗教欄復活若くは創設。／（3）仏教書稀

有の売れゆきに伴ふ出版界の活躍。及び諸雑誌（例へば、改造、中央公論、文芸春秋、経済往来等々）へ宗教関係記事の増加。／（4）宗教講演会への聴講者大衆の殺到。／（5）類似宗教の夥しい数の文部省へ届出（例へば多くは一日二、三件、平均一週一件に達すといふ）。／〔略〕／（6）図書館における宗教書貸出数の著しい増加。／〔略〕／（7）其他、仏教復興現象に特に拍車をかけたと思はれるものは、偶々本年は第二回汎太平洋仏教青年会大会といふ国際的会合がわが国の当番で七月、東京及び京阪にもたれた。それに丁度仏誕二千五百年を迎へて、高楠、井上両博士の主唱に基き記念の諸事業が為されたこと等々。これ以外にも尚ほ挙ぐべき若干の催しものもあるがそれらを一切省略しても、前記二大催しは仏教界の一大躍進を期待するに充分であらう（越智道順「第一、所謂「宗教復興」に就て」「一、「宗教復興」の諸現象」）。

資料〈A〉の冒頭にある「〔略〕仏教界は実に素晴らしかつた。外観して宗教復興即仏教復興と云ふも決して不都合ではないであらう」という記述は事実と受け止めてよいであろう。武者小路が仏教関係の三冊の著書を出版した昭和九年は「仏教復興」の一年として近代仏教の劃期となる年であった。「宗教復興」の中心に「仏教復興」が確かに存在し、その「復興」は資料〈B〉の（2）（3）（4）（6）にある、主要新聞の宗教欄の設置、仏教書や雑誌における宗教記事の増加、宗教講演会への聴講者の殺到、図書館における宗教書貸出数の急増など、目に見えるかたちで大きな広がりを示したことがわかる。「宗教復興即仏教復興と云ふも決して不都合ではないであらう」とする資料〈A〉、「仏教復興」「仏教界の一大躍進」という言葉で説明する資料〈B〉、両者で共通して挙げられているトピックが、第二節で検討した仏誕二千五百年問題（〈A〉の一・五、〈B〉の（7））、第二回汎太平洋仏教青年会大会（〈A〉の三、〈B〉の（7））、ラジオの「聖典講座」（〈A〉の四、〈B〉の（1））であった。

同時代資料を離れ、大谷栄一・吉永進一・近藤俊太郎編『近代仏教スタディーズ―仏教からみたもうひとつの近代』（平成二八［二〇一六］年四月、法藏館）所載の「日本近代仏教史年表」を参照して、現代の仏教研究における昭和九年についての概括を確認したい。

三―一～一五：〔一〕[15] 東京放送局で『聖典講義』の放送が開始され、友松円諦による『法句経』の講義がラジオ放送される。五―：〔二〕川内唯彦が検挙され、日本戦闘的無神論者同盟は組織活動を停止する。九―一：〔三〕友松円諦・高神覚昇・松岡譲らが全日本真理運動を開始する。一二―：〔四〕東京帝国大学において、仏誕二五〇〇年記念仏教学大会が、井上哲次郎の発起により行われる。

〈A〉・〈B〉二つの同時代資料に共通していた三つのトピックのうち、仏誕二千五百年問題とラジオ「聖典講義」（以後は正式名称の「聖典講義」を用いる）はここでも挙げられている。昭和九年の仏教界における主要なトピックとして資料〈A〉・〈B〉および「日本近代仏教史年表」が共通して挙げた、仏誕二千五百年問題とラジオ「聖典講義」のうち未検討の後者を、以下検討する。なお、全日本真理運動（以下、原則として「真理運動」と記す）はラジオ「聖典講義」と不可分に結びついているため、これについても論じることとする。[16]

六、ラジオ番組「聖典講義」と『仏教聖典を語る叢書』

昭和九年が仏教界にとって重要な一年になったのは、仏教がラジオというメディアと結びついたからだと言ってよい。大正一四（一九二五）年の放送開始から九年が経ち、普及しつつあった各家庭のラジオに届いたインパクト[17]がこの年にお

ける仏教のありようを大きく変えた。前節で引用した『読売新聞』掲載記事「昭和九年の宗教界 得意の仏教界【中】」の「四」で「聖典講義」のラジオ放送と真理運動が結びつけられていたことからもわかるとおり、真理運動が生まれたのはラジオ番組が爆発的な人気を博したからである。

「聖典講義」のラジオ放送については、坂本慎一による研究の積み重ねがある。[18]『戦前のラジオ放送と松下幸之助 宗教系ラジオ知識人と日本の実業思想を繋ぐもの』(「第二章 宗教系ラジオ知識人・高嶋米峰と松下幸之助」「Ⅲ 松下電器の躍進と高嶋米峰の活躍」)において、坂本は日本放送協会編輯『昭和十年 ラヂオ年鑑』(昭和一〇〔一九三五〕年五月、日本放送出版協会)を紹介している(表題にある「昭和十年」は発行年を示しており、内容は昭和九年のもの)。ラジオ版「聖典講義」の流行についてメディア当事者である日本放送協会がどのように受け止めたかを確認できる資料であり、なおかつ流行の要因についての同時代における分析も含んでおり貴重なので、坂本が引用した部分よりも長く原資料から紹介する。

> 聖典講義は昭和九年の放送史を飾る一大収穫である。その成功はラヂオの教養プロに新紀元を画したのみならず、ラヂオの声価を高からしめ、またその放送記録の出版は洛陽の紙価を高からしめてゐる。過ぐる三月東京地方で此の放送を始めた当時、誰が今日の成功を予期したであらうか。一般社会も大した関心を示さなかつたし、此の放送プラン作成者も恐らくはそんな大きな期待を懸けてゐなかつたに違ひない。〔略〕一ヶ年に亘つて尚益々その反響を大にして、全社会的な支持と賞讃を博してゐるのである。〔略〕
>
> 働けど働けど生計の楽にならない農村、ジャズに踊るネオンの灯影、放浪者の群を見る都会、富むと貧しきと生活の相は異にしてゐるが、人々は皆悩んでゐる。生活苦からではない。たゞ漠とした焦燥と不安に駆られた儚なさ、頼

りなさの孤独感である。憬れの物質文化は巷に華と咲いてゐるが魂を失へる放浪者の孤独感を消す由もない。何か頼るべき力が得たい、空虚な心に充実感が欲しい。物質への欲望で心眼を盲した民衆は今や斉しく「安心と悟道」に憧れてゐるが、嘗ての魂の安息所たりし宗教の殿堂は奥深く香煙に隠れて民衆への扉を閉してゐる。

此の時暁の鐘を撞くラヂオの聖典講義、名僧知識の打ち鳴らす魂の警鐘は確かに救済であつたに違ひない。げにラヂオは時代文化の華であり、もろ〳〵の美はしきもの、善きもの、真なるものを惜しみなく皆人に与へてゐる。嘗て黴臭い書斎に、貴族趣味のサロンに閉されてゐた知識の宝庫は大空に開け放たれた。然し迷へる民衆の心魂を揺り動かす聖なるものに恵まれる事が少なかつたのである。「宗教復興」の声を聞くが此の時代の声の裡にラヂオの聖典講義が如何なる役割を果したか、兎もあれ昭和九年を飾る聖典講義は永く讃へらるべき数々のものを残してゐる。

次はその記憶さるべき放送記録であるが、これは約一年の後、即ち昭和十年二月に至つて「朝の修養」と改題され従来仏教に関する経典を主としてゐたのを範囲を広げて、「国民としての精神を培ひ、人間としての魂を養ふ」といふ建前から、建国史話、帝国憲法解義、その他日本精神の顕揚に資する我国古来の先哲の遺訓の解明に力める事になつた（『昭和十年 ラヂオ年鑑』「プログラム欄」「宗教放送」「聖典講義」）。

放送当事者による『年鑑』にもかかわらず、「一大収穫」「新紀元」「全社会的な支持と賞讃」「永く讃へらるべき」など自画自賛の評価の言葉、「働けど働けど生計の楽にならない農村、ジャズに踊るネオンの灯影、放浪者の群を見る都会」、「人々は皆悩んでゐる。生活苦からではない。たゞ漠とした焦燥と不安に駆られた儚なさ、頼りなさの孤独感である」など、時代背景に対する詩的、修辞的、感傷的な表現が見られる。当時の文壇は「シェストフ的不安」をめぐって沸騰したが、日本放送協会による時代把握においてもやはり「不安」はキーワードであった。物質の欲望によってかえって強く自

覚される空虚をもてあます現代人に宗教が新たな相貌で立ち上がってくるというのである。ラジオ番組「聖典講義」「朝の修養」の新しさは、時代において深まる「焦燥」・「不安」・「孤独」・「空虚」を抱えた現代の地方農家や都市生活者に届けられるコミュニケーション方法の新しさにあったといえるだろう。

前出『近代仏教スタディーズ―仏教からみたもうひとつの近代』所収「第3章　よくわかる近代仏教の世界」「第3節　メディアを活用する」「3　ラジオ説教の時代」は、坂本による昭和九年におけるラジオ版「聖典講義」の影響についてのまとめと呼べるものである。「ラジオ説教」とは「聖典講義」ラジオ放送のことであるが、人気を博した出演者名や、全日本真理運動を含めたその後の展開についても説明があるので、まとめて引用しておく。

昭和九年三月、朝の新番組『聖典講義』がはじまった。日本放送協会の職員で、自身も寺院の出身であった、矢部謙次郎による企画である。この番組の最初の出演者に抜擢されたのが、友松円諦（一八九五～一九七三）であった。〔略〕昭和九年三月一日から日曜を除く毎日、二週間にわたって、友松は『法句経』を放送した。仏教の教えを身近なものとして説くわかりやすさと、聞く人の心を引きつける西洋風の話法により、一躍大衆の関心を集めることになる。東京ローカル放送であったにもかかわらず、放送が終了する前から関係者の予想をはるかに超える大量の手紙が放送局に寄せられ、そのどれもが絶賛と激賞の内容であった。／続いて『聖典講義』に登場したのが、高神覚昇（一八九四～一九四八）である。〔略〕友松による成功を受けて、高神の『般若心経講義』は全国で放送され、友松に劣らぬ人気を博した。『聖典講義』は、七月に加藤咄堂が『菜根譚講話』、八月に高嶋米峰が『遺教経（抄）』を放送している。友松は一〇月に再度登場し、『阿含経』を放送した。一年後に番組は、『朝の修養』と改題され、不動の人気番組となったのである。／放送への絶大な支持を受け、友松と高神は全日本真理運動を起こすこととなった。昭和

九年九月一日、事務所を構えて運動の発足日とし、翌昭和一〇年一月に月刊誌『真理』が創刊となる。運動の目的について友松は「すべての人々に人間生活の指導原理を与え、人生の価値に目覚めさせたい」としている。また、真理運動は明治・大正期の新仏教運動を受け継いだ運動であると主張し、超宗派で現世肯定的な仏教思想を説いた。全国に一〇〇〇あまりの支部が結成され、最盛期には二万五〇〇〇名以上の正会員を集めている。〔略〕放送による啓蒙が成功したことによって、放送関係者のあいだでは次第に「放送の指導性」が強調されるようになる。受信機が国民的に普及すると、日本放送協会はすべての新聞を凌駕する国内最強のマスメディアとなった。日中戦争以降、今度は「武士道」や「日本精神」が喧伝されるようになり、ラジオは日本の軍国主義化に大きな役割を果たすことになる。

ラジオ番組「聖典講義」（および「朝の修養」）で人気を博した、友松円諦・高神覚昇・加藤咄堂が『仏教聖典を語る叢書』の執筆者であったことを思い出してほしい。ラジオ番組「聖典講義」の放送開始が三月一日、『仏教聖典を語る叢書』の第一回配本が七月五日（第一巻、山辺習学『仏教経典を語る』）であるから、『仏教聖典を語る叢書』のタイトルに含まれる「聖典」および「語る」はラジオ番組人気にあやかって取り入れられたと考えることができ、本叢書の企画そのものがラジオ番組「聖典講義」の成功を契機として生まれたと考えることもできよう。[19] 仏教の爆発的な流行を前提に、仏教の素養のある文学者を執筆者に迎え、早い配本で文学者担当巻を読者に届けることに加え、ラジオ番組の人気講演者を執筆者に揃えたからこそ、パンフレットにあった「現代人にして仏教を知らぬのは最大恥辱で時代遅れの甚だしいものといふことになつた。今日本には所謂読書階級は壹百万と見て、此の叢書は少くも百万部は普及されるべきものと信ずる」などの謳い文句を躊躇なく使うことができたのであろう。『仏教聖典を語る叢書』は全日本真理運動の機関誌『真理』などとともに、ラジオ放送を起点とした「仏教復興」ブームが生みだした媒体の一つと見ることができる。実は、『仏教聖典を

語る叢書』パンフレットの最終面には、出版社によってラジオへの言及もなされていた。

何といふすばらしさ！／六ヶ敷くてとても近よれなかつた仏教のお経が、今の文壇の大家によつて書きあらためられ、楽にその深遠な思想を味ひ信ずる事が出来るとは何といふすばらしさだ。文壇の大家が此の企てに双手をあげて賛成し、此の著述にかゝられるといふ事は全く仏縁といはうか、日本の思想界宗教界のためにも喜ぶべき現象だ。此の頃の日本は仏教もので渦をまいてゐる。ラヂオの聖典講義や、弘法大師の讃仰、仏誕二千五百年運動等色々の原因もあるが兎に角頼もしい現象だ。

さらには、前にも引用したが、武者小路『維摩経』に同封されていた『仏教聖典を語る叢書月報』「第二号」所載の「東京、豊島生」による文章の中にも、ラジオへの言及と「仏教復興」の言葉を見つけだすことができる。「一般大衆に遅蒔乍らも祖国の思想の認識と共に仏教への関心の熾烈なるものあるは蓋し思ひ半に過ぐるものがある。特にラジオの聖典講義は意外の反響を起し、人も吾も今更その偉大なる実践的価値効果を確認するに至る。〔略〕この仏教復興は時期に値遇せる時、教界は一層の拍車を傾ける必要あり、時はよし釈尊降誕二千五百年の聖辰（ママ）に当るも仏縁の然らしめるによるが、此の時随所に復興の声、事業の企図さるゝ中、本叢書は或る見地より見て仏教界破天荒の盛観である」とある。『仏教聖典を語る叢書』における武者小路への期待は、ラジオというメディアによって醸成された側面を持っていた。

七、真理運動の武者小路との接点と三木清による仏教復興批判

坂本慎一の『戦前のラジオ放送と松下幸之助 宗教系ラジオ知識人と日本の実業思想を繋ぐもの』「第三章 宗教系ラジ

オ知識人・友松円諦と松下幸之助」「Ⅳ 真理運動の戦争肯定」によれば、「真理運動は、日中戦争以降、戦争に対して肯定的になっていった。太平洋戦争が終結するまで、戦争に対して建設的な批判はあっても、否定的な批判はしなかったのである」、「友松は昭和四八（一九七三）年一一月一六日に亡くなり、月刊誌『真理』は昭和五九（一九八四）年一二月に廃刊となった」とあり、友松円諦らによって始められた真理運動は、戦争協力の時期を経て、昭和五十年代まで続いたことが確認できる。

真理運動の中心人物である友松円諦は明治二八（一八九五）年生まれで昭和四八（一九七三）年に亡くなり、武者小路実篤は十年早く明治一八（一八八五）年に生まれ、三年ほど遅い昭和五一（一九七六）年に亡くなっている。ふたりは生没年が比較的近く、戦中の振るまいも似ている。[20] 武者小路実篤の戦後における代表的な小説「真理先生」および、「真理先生」を含む〈山谷もの〉と呼ばれる一群の作品における作中人物としての真理先生と真理運動との直接的な関係を示す資料は管見の限り見つかっていないが、昭和二四（一九四九）年一月から翌年一二月までの「真理先生」連載時期（掲載誌は『心』）が真理運動の機関誌『真理』刊行時期に含まれていることに加えて、真理運動の展開の広汎さと影響の大きさを考え合わせれば、何らかのつながりを見いだしうる可能性は残っている。昭和九年における仏教への接近・戦中における戦争を肯定する発言・戦後における左翼的イデオロギー批判へと続く一連の武者小路の展開の広汎さを参照する人物として、昭和二三（一九四八）年七月に創刊する『心』の同人たち以外に、真理運動に関わった仏教関係者たちをも見いだしうるであろう。

第六節における『昭和十年 ラヂオ年鑑』からの引用文末尾には「「国民としての精神を培ひ、人間としての魂を養ふ」といふ建前から、建国史話、帝国憲法解義、その他日本精神の顕揚に資する我国古来の先哲の遺訓の解明に力める事になつた」という一節が、こちらもまた第六節における坂本慎一「3 ラジオ説教の時代」からの引用文末尾には「日中戦争

以降、今度は「武士道」や「日本精神」が喧伝されるようになり、ラジオは日本の軍国主義化に大きな役割を果たすことになる」という一節があった。昭和九年における「仏教復興」の問題を考えるにあたって重要なことは、この状況がすでに「建国」回帰、「日本精神の顕揚」、「武士道」や「日本精神」の強調、軍国主義化への明確な一歩を踏み出したものとみなすべきものかどうかという点である。これを武者小路実篤に即していえば、『維摩経』にみられる武者小路流の大乗仏教への接近にすでにナショナリズムが刻印されていると見るべきかどうかという問題である。

この問題を考えるにあたって、吉田久一の『近現代仏教の歴史』[21]「六章 社会的危機＝過渡期と仏教」「㈣「仏教復興」、宮沢賢治」における当時を総括した文章を参照する。

戦争前夜「仏教復興」が叫ばれたが、それも戦争の抑止力とはならず、不安の時代の小市民に対する「慰藉」に留まった。三四（昭和九）年三月一日―一五日にかけて友松円諦が『法句経講義』を、その後を受けて高神覚昇の『般若心経講義』が放送され、そのたぐい稀な現代的説教に小市民が魅了されたのは事実である。その後出版されてマス・メディアの宣伝もあり、不安の中にあった小市民に訴えるものがあって、「仏教復興」を思わしめた。

友松・高神に江部鴨村・松岡譲・増谷文雄・梅原真隆・山辺習学等も加わって、三四年真理運動が開始され、三五（昭和一〇）年一月から機関誌『真理』を発刊した。支部四四〇余、会員二万人、『真理』発行部数は三万といわれる。旧来の既成仏教が、社会的危機に対して、なすすべもなく、体制順応に奔走する中で、友松らが既成仏教から離れて、新鮮な仏教教典の解釈をしたため、日中戦争前後の不安な民衆に影響を与えたものである。大正デモクラシーの残照を残す時代の小市民の感性に訴えるものがあったのである。しかし、同運動は社会運動ではなく、宗教運動であり、「非常時」に対する批判勢力とはならなかった。／友松は三二年から三六年まで仏教の法律・政治・経済を研究

する仏教法制研究所を主宰した。[22] 機関誌『仏教』は編集方針を「自由にして進歩的な学風」「現実的な諸問題への最も鋭敏な関心」を掲げ、優れた論文も多かった。

「不安の時代の小市民に対する「慰藉」」、「不安の中にあった小市民に訴えるものがあっ」た、「新鮮な仏教教典の解釈をしたため、日中戦争前後の不安な民衆に影響を与えた」、「大正デモクラシーの残照を残す時代の小市民の感性に訴えるものがあった」などと肯定的な面が記される一方、「戦争の抑止力とはなら」なかった、「社会運動ではなく、宗教運動であり、「非常時」に対する批判勢力とはならなかった」という限界についても明記されている。「仏教復興」をめぐるブームや運動自体に肯定的な意味を認めながらも、以後のナショナリズムに対する抵抗の根拠や拠点になりえなかった、社会運動として見た時の脆弱さを指摘する吉田の複眼的理解を共有したい。

同時代において「仏教復興」を中心とした「宗教復興」の限界とそこに孕まれる問題点について的確に指摘する声があった。三木清「宗教復興の検討」（『報知新聞』昭和九［一九三四］年一〇月一、二、三、四、五日）である。[23]

〔略〕この頃宗教復興といはれるものは主としてヂヤーナリズムの上における現象である。そしてこの方面への進出にしても相対的なことであつて、宗教復興などといはれ得るほどのものであるか、疑問とすべきである。

〔略〕宗教復興といつても、えらい宗教家が現れたとも聞かない。新しい宗教運動が勃興したとも聞かない。〔略〕教団の内部には宗教復興などいふ気運はほとんどなく、寺院は荒れ、僧侶に対する大衆の帰依は増してもゐないであらう（以上は【1】「批判の手懸りは何処にあるか」一日掲載分）。

もし今日復興について語るならば、『宗教復興』といふべきでなく、単に『古典復興』といはるべきであると思ふ。実際、何程かの復興があつたとすれば、それは「聖典」、仏教古典の復興であつた（以上は【2】「結局は一つの古典復興だ」二日掲載分）。

いはゆる日本主義なるものは、一時廃仏棄釈（ママ）論をすら巻き起しさうな形勢にあつたが、しかしこの二三年来いろいろ宣伝されて来た東洋思想のうち、最近の仏教聖典ほど一般的な、いきいきした関心を喚び起したものがないといふことは、意味深いことでなければならぬ。それはともかく偏狭な日本主義では到底駄目であるといふことを明瞭にした。

ラヂオの聖典放送が歓迎されたひとつの理由として、それまでの修身教科書的国民道徳論に対して闊達自在な処世訓としての意味がこれに認められたといふことが挙げられないであらうか（以上は【3】「思想問題としての宗教復興」三日掲載分）。

この頃仏教が歓迎されてゐるのは、宗教復興といふ名にも拘はらず、宗教としてよりも、寧ろ道徳乃至処世訓としてではないかと思ふ。[24]

私は東洋思想のひとつの特色を日常性の尊重といふことに見てゐる。日常性の深い意味を考へた点に東洋思想のともかく重要な特色がある。〔略〕もしさうであるとすれば、今日いはゆる非常時にあたつて、何故に特にインテリゲンチヤの間で仏教が関心されてゐるかといふ理由も理解されるであらう。〔略〕非常の時機（ママ）をどうすることもできないインテリゲンチヤは、むしろ日常性に深い意味を考へる思想のうちに非常時意識の解消を企てようとする。かくの

如きことが最近、積極的な信仰に達したわけでなくて仏教に興味がもたれる理由、その心理的原因の大きな部分をなしてゐるのではないかと思ふ。そこに人々は非常時における処世法を見出そうとしてゐるといひ得るであらう。／日常性の尊重はもとより重要なことに相違ない。日常性の深い意味の認識は西洋哲学には欠けてをり、これは今後我々によつて東洋思想から継承発展されねばならぬものである。しかしながら日常性の思想は、特にそれが宗教的根底から離れて単なる処世法となる場合、極めて容易に現実への妥協、歴史からの逃避となる危険をもつてゐる。そして今日この危険は大であり、警戒を要する。我々はかへつて日常性のうちに歴史性を明かにする新しい日常性の哲学を樹立しなければならぬ。哲学がこれまで日常的なものと歴史的なものとを何か全く異なるものであるかのやうに見る傾向があつたとすれば、我々はそれらを統一的な根底において、相互の正しい連関において認識しなければならない。従来の如き自然主義的根拠において日常性の意味を考へるのではなく、寧ろ『日常性の歴史哲学』ともいふべきものが要求されてゐる（以上は【4】「日常性の歴史哲学を要求」四日掲載分）。

長い引用なので、箇条書き的に要約しておく。「宗教復興」が主としてジャーナリズム上の流行だったこと、宗教の現場に目を転じれば、すぐれた宗教家も登場してはおらず人々の宗教的な帰依も見られなかったということ、「復興」したのは宗教ではなく古典であったと見るべきこと、ラジオ聖典放送を起点とした「仏教復興」「宗教復興」は偏狭な日本主義に収まらない生き生きしたもので評価すべきものであったということ、仏教を含む宗教が「復興」したのは信仰としてではなく「道徳」や「処世訓」としてであったこと、西洋に較べて東洋において深められている日常性の尊重自体は価値があるが、非常時に事態との対峙を避け、現実に妥協し、歴史からの逃避を許容する点で危険をはらみ、「日常性のうちに歴史性を明かにする新しい日常性の哲学を樹立しなければならぬ」ということ、いずれも昭和九年における「仏教復興」

の現象に対して、過不足のない、的確な同時代における分析と批評だったといえる。

三木清は昭和九（一九三四）年七月に「時代批評の貧困」を『文芸通信』に書き、そこで「ニイチエはニイチエの時代、ジイドはジイドの時代、その時代時代の人生批評家である。日本には又日本特殊の社会、生活、伝統があり、さういふものに対する新しい眼をもつた作家が出て来なければならない。／人道主義時代には白樺の運動なんか多少それを持つてゐた。然し今日、それに匹敵するやうな一種の批評を有つてゐる青年が純文芸の方にゐるかといふと、それは疑問である」と『白樺』派に言及しており、青年時代の三木の読書経験には武者小路ら『白樺』派のものも含まれていたから、[25] 昭和九年の宗教復興をめぐる状況を構成する当事者として武者小路の存在は三木の念頭にあったかもしれず、さらにそこには失望や無念も含まれていたかもしれない。

本多秋五による戦後の第一声は『近代文学』創刊号（昭和二一［一九四六］年一月）の「芸術 歴史 人間」であり、本多はその五年後にあたる昭和二六（一九五一）年二月から五月まで『群像』で「『白樺』派の文学」を連載し、武者小路実篤を中心にその「自己を生かす」可能性と歴史性を充分にとりこめない思想の限界とを指摘した。三木の「宗教復興の検討」における「日常性の歴史哲学」樹立の要請は、昭和九年の時点において本多の論点を先取りしたものと見ることができる。「仏教復興」がかまびすしかった昭和九年の武者小路は仏教についての本を上梓し、歴史的人物の評伝を書き、時事についても積極的に発言した。昭和九年においても、彼の思考の中心をなす鍵概念は『白樺』創刊直後から大きくは変化せず、「自己」や「人類」であった。しかし、変わらぬ鍵概念は現世と少しずつ融和的な関係をもちはじめていた。三木の言葉を使えば、〈日常〉に溶け込み、〈歴史〉に背を向け始めたといえるだろう。三木の発した〈日常性〉と〈歴史性〉を根底で統一させなくては危険であるという警鐘は武者小路には届いていなかった。[26]

〔注〕

(1) 柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会 大正文学史』(昭和四〇〔一九六五〕年四月、岩波書店。初出は「〈座談会・近代日本文学史〉16 武者小路実篤ほか—白樺派の文学(3)—」『文学』昭和三七〔一九六二〕年五月)に収められている、亀井勝一郎・本多秋五・勝本清一郎・猪野謙二による座談会「武者小路実篤—「白樺」の人びと—」には、亀井と本多の時代区分が対話的に紹介されていてわかりやすい。なお、吉本弥生は「武者小路実篤『二宮尊徳』における通俗性と「生長」」(『有島武郎研究』平成三〇〔二〇一八〕年五月)において、『キング』に昭和四(一九二九)年一〇月から昭和五(一九三〇)年七月まで連載され、同年一二月に大日本雄弁会講談社から単行本が刊行された「二宮尊徳」について、修養・経済的自立・トルストイとの関係などの面から論じており、本論と近接する時代・主題を取り扱っているが、直接的には関連しないので、言及はしない。

(2) 『読売新聞 夕刊』文化欄にほぼ週に一回、全四〇回、昭和三〇(一九五五)年二月二三日から同年一二月一九日までの連載。引用部分は九月一九日(第二八回)分。単行本は昭和三一(一九五六)年一一月、読売新聞社。

(3) 『重光』昭和九(一九三四)年五月の「六号雑記」に「今度広告欄に出てゐる通り山本書店から僕の「空海及び其他」と云ふ本を出す。僕の好きな日本人に就て僕のかいたものを集めたものだ。重光にのつた黒住のことなぞも出る。空海、武蔵、尊徳、一休、その他のものを集めた。愛読して下されば嬉しい。山本書店は新しき村の兄弟で独文を出た山本武夫が今度始めた本屋だ」とある。

(4) 『婦人之友』昭和九(一九三四)年一月号で武者小路は、赤井米吉・今井邦子・小川未明・杉森孝次郎・杉山平助・竹内茂代・帆足みゆき・羽仁吉一・羽仁もと子と「座談会 非常時世相批判」に参加し、『経済往来』昭和一〇(一九三五)年四月号で武者小路は、長谷川如是閑・戸坂潤・清沢洌・室伏高信と「「今日及び明日」を語る夕」座談会に参加している。後者の座談会において司会を務めた室伏は冒頭で「お集りの方は当代一流の思想家でもあり、頭脳の明敏な方々でありますから」と紹介している。『報知新聞(夕刊)』における昭和九年に発表された全十八回の記事は、毎週一回の「日曜夕語」枠で随筆が連載されたものである。二月二六日から六月二五日まで、十四回が一面に、四回が二面に掲載された。当時における武者小路の時評家の側面を物語る資料なので、見出しがついた回の見出しをここに記しておく。「原敬を憶ふ」(二月二六日)、「文相のことなど」(三月五日)、「競争心」(三月一二日)、「人力」(三月一九日)、「直木について」(三月二六日)、「夢もの語り」(四月二三日)、「極東大会問題」(四月三〇日)、「日本と支那」(五月七日)、「国宝展を見て」(五月一四日)、「芸術家の頑固さなど」(五月二一日)、「金と生活」

（五月二八日）、「文芸復興について」（六月一一日）、「東郷大将に就いて」（六月一八日）。当時の武者小路は、純文学を中心とした文壇では存在感を失っていたが、大衆的な歴史読み物の書き手、時事について発言する言論人・知識人としては一定以上の評価を受けていたと考えられる。

（5）『武者小路実篤全集 第十巻』（平成元［一九八九］年六月、小学館）の紅野敏郎「改題」に、『論語私感』発表までの長い経緯が詳しく説明されている。『論語』関連の発表作品に限定して紹介する。大正一五（一九二六）年五月「論語の講義（一）」（『改造』）、六月「論語の講義（二）」（『改造』）、昭和三（一九二八）年三月「論語を読んで」（『大調和』）、四月「論語を読んで」（『大調和』）、昭和四（一九二九）年一二月～昭和五（一九三〇）年六月「論語随意講義」〔二回〕、「論語自由講義」〔五回〕（『独立人』）、昭和五（一九三〇）年八月「論語自由講義」（『新しき村』）、昭和八（一九三三）年八月「論語の講義」（『重光』）、九月「論語の講義」（『重光』）。発表作品に限定しても、足かけ八年かけてようやく出版に漕ぎつけたのが『論語私感』であった。また、小学館版『武者小路実篤全集 第十八巻』「作品年表」および「著書目録」で確認するかぎり、昭和八年に出版された武者小路の単行本は『論語私感』のみである。

（6）奥付にしたがえば『仏教聖典を語る叢書〔第六巻〕』だが、背・扉・目次等では『維摩経』になっているので、便宜的に以後タイトル表記は『維摩経』とする。

（7）片山倫太郎「川端文学における「仏教的なるもの」への一考察―『維摩経』受容と新感覚派理論への可能性―」（『国文鶴見』平成一九［二〇〇七］年三月）では、岩野真雄『現代意訳維摩経・解深密経』の川端康成への深く長期的な影響について論じられている。

（8）大正時代の宗教小説の流行については、五十嵐伸治・佐野正人・千葉幸一郎・千葉正昭編『大正宗教小説の流行―その背景と〝いま〟』（平成二三［二〇一一］年七月、論創社）などの先行研究がある。本論集には鈴木斌「白樺派と宗教―武者小路実篤『耶蘇』の意味」、千葉正昭「倉田百三の登場」等の論文が収められているが、千葉幸一郎「空前の親鸞ブーム粗描」が同時代資料を博捜し、大正一一（一九二二）年に発表された親鸞が登場する十四作品について、作家情報も含めて詳しく説明していて参考になる。千葉は大正一一年に親鸞ブームが起こった理由として、前年に「①泡鳴の死と創作月評会の再開／②いわゆる「恵信尼文書」の発見による親鸞実在の証明／③演劇「出家とその弟子」の成功」を挙げている。また、翌年の大正一二（一九二三）年が前年にもたらした影響について、「大正十二年（一九二三）浄土真宗の立教開宗七百年として大規模な法要が行われた。そのため

大正十一年には、浄土真宗本願寺派や真宗大谷派などの真宗十派が協和し、親鸞思想宣伝の創作文や宗歌を懸賞付きで募集したり、高島米峰や南條文雄らを講師とする記念の宣伝講演会を行ったりしている」とまとめている。親鸞ブームが起きた大正一一年から昭和九年までは十二年ほどしか時は経っていない。

(9) 菊池寛『十住心論＝弘法大師と其宗教＝』（第十二巻・第一一回配本）の巻末に付いている広告では、稲津紀三『中論』が第十一巻、三木清『起信論』が第十六巻となり、全十六巻構成となっていた。パンフレット「6」頁から始まる「『仏教聖典を語る叢書』分科及内容」の三木清『起信論』の欄には、「〔略〕哲学的に見たる仏教概論である。本論を通観する事によつて仏教の教理は容易に之を観取し得るであらう。哲学界の新人、三木氏は本論に対し現代哲学の立場より之を解明叙述すると云へば、此の起信一論によりても先づ根幹的に仏教思想の現代化が得られると云ひ得やう」とある。現代哲学の旗手であった三木清に、大乗仏教の入門書『大乗起信論』を解説させようと、第十一巻を二巻に分けて三木には第十六巻を担当させるように変更し、第一四回配本から三年半も待ったがついに叶わず、全執筆者の中で最年長者である加藤咄堂に交代してもらった経緯が浮かびあがる（第一四回配本の『勝鬘経』も真野正順から加藤咄堂に代わり、最初執筆予定になかった加藤が結局は一人だけ二冊を連続して執筆することになった）。

(10) 調布市武者小路実篤記念館および神奈川近代文学館の蔵書に以下の図書があることがデータベースで確認できるので、参考として記しておく（データベースで「版」とあるものも「刷」で統一して表記）。『日蓮』第一刷＝昭和四年六月三日。『二宮尊徳』第一刷＝昭和五年一二月五日、第八三刷＝昭和一〇年一一月一八日、第九五刷＝昭和一一年一〇月二五日、第一〇一刷＝昭和一二年一〇月二五日、第一〇三刷＝昭和一三年一〇月三〇日、第一〇五刷＝昭和一四年九月五日、第一一三刷＝昭和一七年一二月一〇日。『井原西鶴』第一刷＝昭和七年一月二五日。『大石良雄』第一刷＝昭和七年六月二五日、第一五刷＝昭和七年七月五日、第一八刷＝昭和七年一二月二五日、第二四刷＝昭和八年一〇月二五日、第四三刷＝昭和一五年一月一〇日、第四五刷＝昭和一六年三月一五日。『論語私感』第一刷＝昭和八年一〇月五日、第二刷＝同年同月二五日、第三刷＝同年一一月一五日、第四刷＝同年一二月一〇日、第六刷＝昭和九年一〇月一〇日、第九刷＝昭和一三年一一月一日、第一一刷＝昭和一五年三月一日、第一二刷＝昭和一六年六月二〇日。

(11) 長尾雅人『『維摩経』を読む』（昭和六一〔一九八六〕年七月、岩波書店。引用は、平成二六〔二〇一四〕年一〇月、岩波現代文庫版）。「第六講 仏陀の道を行く」「5 結尾の諸章」。

(12) 釈徹宗『NHK100分de名著　維摩経』（平成二九［二〇一七］年六月、NHK出版）。「第4回 あらゆる枠組みを超えよ！」。

(13) 「後篇」「形式に就て」「一、高き調子の創作」では、『維摩経』における表現面の特徴についてまとめて記しているので、全文引用する。「この経は誰でも読めばわかるが、三つの部分からなりたつてゐる。／巻の上、巻の中、巻の下に別（ママ）れてゐるが。（ママ）／巻の中が本文で、上はそれまでの導きで、下は、調子の高い処があり、話をまとめて、もう一度はつきりさせた処があり、殊に尽・無尽解脱法門の仏陀の説法なぞがあるが、矢張り最高峰は「巻の中」にあつて、維摩詰の沈黙をその頂上に置てゐるやうに見（ママ）へる。／今、その話の順序が、いかに注意深く行はれてゐるかを見たいと思ふ。／この経の特色は元より内容にあるが、その内容を表現させるためにとつた形が実に注意深（ママ）かく、ぬけ目がない上に、一種の調子がある。決して説教の為に、事実をならべたのではない。内から出る調子で、事件も生れ、説教も生れてゐる。其処に僕は感心するのだ。たしかにこの作者は詩人である。書きたいものが内の底の底から生れてゐて、聞き覚えではなく、全体が一丸になつて、流れる処に流れてゐる。／だからその経は一つの創作と見ることが出来、しかも極めて高き調子の創作である。／考へ方にも筆の向く処極度までゆかないと、後に引きかへして来ないし、極度に云ふべきことを云ふと、場面が一廻転する処など、作家としても凡手ではない。実に生れつきにその調子をのみこんでゐる。人間の心の動きを実によく知つてゐると云へる。」

川端康成と『維摩経』については、前出の片山倫太郎「川端文学における「仏教的なるもの」への一考察―『維摩経』受容と新感覚派理論への可能性―」、宮沢賢治と『維摩経』については、工藤哲夫「賢治と維摩経」（京都女子大学宗教・文化研究所『研究紀要』平成二［一九九〇］年三月）、岡本かの子と『維摩経』については、外村彰「岡本かの子「金魚撩乱」と「維摩経」」（『昭和文学研究』平成九［一九九七］年二月）等を参照。また、宮内淳子は「岡本かの子―近代仏教の受容とその小説について」（『国文学 解釈と鑑賞』平成二一［二〇〇九］年二月。特集＝現代作家と宗教―仏教編）で、『仏教聖典を語る叢書』（第七巻）岡本かの子『観音経＝附法華経＝』（執筆予定は『観音経』）について論じ、同時代の仏教をめぐる状況についても言及している。

(14) 本資料の存在は、大谷栄一『近代仏教という視座―戦争・アジア・社会主義』（平成二四［二〇一二］年三月、ぺりかん社）「第三章 反戦・反ファシズムの仏教社会運動―妹尾義郎と新興仏教青年同盟―」「一、問題の設定―新興仏教青年同盟の仏教社会運動」によって知った。

(15) 本引用における〔一〕等の番号は引用者が付したもの。

(16) 重要性が資料〈A〉・〈B〉で指摘されている第二回汎太平洋仏教青年会大会、資料〈A〉のみで指摘されている弘法大師

一千百年遠忌法要、「日本近代仏教史年表」で指摘されている日本戦闘的無神論者同盟の組織活動停止については紙幅の関係でこれ以上論じない。

(17) 坂本慎一『戦前のラジオ放送と松下幸之助 宗教系ラジオ知識人と日本の実業思想を繋ぐもの』(平成二三〔二〇一一〕年五月、PHP研究所)「第三章 宗教系ラジオ知識人・友松円諦と松下幸之助」の注43によれば、昭和九年三月における世帯当たりのラジオ受信機普及率は、東京で四三・一%、全国で一三・四%であった(依拠する資料は、昭和一四〔一九三九〕年五月発行の、社団法人日本放送協会編纂・発行『日本放送協会史』)。また、同著者による『ラジオの戦争責任』(平成二〇〔二〇〇八〕年三月、PHP新書)「序章 世界最強のマスメディア・日本のラジオ」に掲げられた表によれば、昭和九年はラジオの受信契約者数が朝日新聞の購読者数に追いついた年であり、坂本による戦前のラジオ放送の時代区分によれば、「初期放送の時代」(大正一四〔一九二五〕年〜昭和五〔一九三〇〕年)、「教養放送全盛の時代」(昭和六〔一九三一〕年〜昭和一一〔一九三六〕年)、「戦争報道中心の時代」(昭和一二〔一九三七〕年〜昭和二〇〔一九四五〕年)のうち、第二放送も始まった「教養放送全盛の時代」にあたる。

(18) この領域の主な著書としては、既出の『ラジオの戦争責任』、『戦前のラジオ放送と松下幸之助 宗教系ラジオ知識人と日本の実業思想を繋ぐもの』がある。

(19) 第三節で引用したように、パンフレット内「『仏教聖典を語る叢書』刊行趣旨」の文末には「昭和九年六月 刊行代表者 岩野真雄識」とあるが、それでも本叢書がラジオ番組人気を受けて企画されたと考えることは可能であろう。

(20) 坂本慎一同書同章「Ⅱ 友松円諦と真理運動の展開」には「真理運動の特徴を四点挙げるとすると、第一に超宗派の活動であること、第二に経済活動と宗教的反省を結びつけようとする傾向が強いこと、第三に女性や二十代の若者が比較的多いこと、第四に都市部の人々による活動が多かったことが指摘できる」とあり、第二の特徴は武者小路の人生観や「新しき村」の発想と結びつきにくいが、第一・第三・第四に関しては一定程度の近似性を指摘できよう。

(21) 原著は平成一〇〔一九九八〕年二月、筑摩書房。引用は平成二九〔二〇一七〕年五月、ちくま学芸文庫。

(22) 第五節で紹介した越智道順『仏教法政経済研究所モノグラフィー(第十輯)『宗教復興論』概観 附「宗教復興論」文献』の発行である仏教法政経済研究所は、吉田がここで記している「仏教法制研究所」と同じ研究施設でないかと推測される。

(23) 本資料の存在は、注(14)と同じく、大谷栄一『近代仏教という視座—戦争・アジア・社会主義』「第三章 反戦・反ファシズ

ムの仏教社会運動―妹尾義郎と新興仏教青年同盟―」「一、問題の設定―新興仏教青年同盟の仏教社会運動」によって知った。

(24) 釈迦・孔子・キリストなどの偉人を超越的存在ととらえず、並列的に許容し、奇跡等も原則として認めない武者小路の宗教観はそもそも道徳的なものと考えられる。笹淵友一は遠藤祐との対談で以下のように述べている。「笹淵　たしかに福音書は読んでいるけれども、キリスト教は素通りしているというふうに考えたこともあったんですが、そう簡単に片付けてしまうわけにいかないんじゃないかと思いますね。内村鑑三はトルストイのキリスト教を、ユニテリアンだと批評していますが、そういうユニテリアン的トルストイの影響もあったんじゃないか。ユニテリアンは世界宗教的な性格をもっていて、仏教などに対して寛容な反面に、キリストの贖罪は信じていません。それはトルストイも同じで労働についても、アダム・イブの原罪による神の呪いではなく、むしろそれは人間の知恵だという理解の仕方なんですね。こういう面でのトルストイの影響は武者小路にとって決定的なものではないかと思います。けれど私が今度『耶蘇』を読みなおして感じたのは、武者小路の福音書の読み方ですが、まっとうに向かい会って、自分の実感に照らし合わせて、実感があれば問題にする、なければ否定するという、極めて武者小路的な把え方ですね。しかしそういう受け取り方が必ずしもまちがっているとばかりはいえないんじゃないかという気がするのです。」(武者小路実篤・賀川豊彦著『近代日本キリスト教文学全集　7』(昭和五二[一九七七]年三月、教文館)「近代日本キリスト教文学全集　月報Ⅸ」「対談　笹淵友一・遠藤祐「武者小路の志と耶蘇」」)。

(25) 昭和一六(一九四一)年六月から翌年一月まで『文芸』に連載された、三木清「読書遍歴」の中では、第一高等学校時代以降における『白樺』派の日本的ヒューマニズムからの影響、京都帝国大学時代における新しき村への関心、「武者小路氏の文学は以前から好きで読んでゐた」(九月号掲載の「九」)という読書経験等が記されている。

(26) 本稿では紙幅の関係で言及できなかったが、武者小路の新しき村についての情熱はこの時期も途絶えることなく(戦前・戦中・戦後と変わらず)、ことあるごとにその可能性を社会に発信していた。昭和九年における武者小路を評価するためには、離村して十年が経とうとしている時期にあっても衰えないその理想主義的な情熱の側面をも加えて、総合的に判断しなくてはなるまい。